故進野久五郎先生とわが生物学会

副会長　本　多　啓　七

去る昭和５９年１０月１９日早朝に，進野先生が急性呼吸不全のため富山市民病院で，お亡くなりになったとの赴報の電話をいただき，全く夢としか思われず，暗涙にむせびました。

９月中旬に進野先生が富山市民病院に入院との電話を中山宇之一先生よりいただき急きょお見舞申し上げたところ，相当に衰弱しておられる容態を眺めて心痛するものがあったが，お亡くになる数日前にお見舞したところ，今度はお元気であるご様子を見て，これでいよいよ全快に向かわれるものと安堵の胸をなでおろして，また来春になると，お元気な姿で野外に出てわれわれを指導して下さいと，いろいろと話をしてお別れした矢さきなので，全く夢のようでならなかった。

進野先生は富山県生物学会を創設され，しかも，この会を育成のために心血を注いで努力なさいました。学会誌第１号の記録によると，「大正１４年９月２９日，本会の設立趣意書を県下中等学校博物科担当教師及び有志諸氏に送り，１０月１０日富山県師範学校に於て第１回会合をなす集れるもの２１名。吉沢庄作，中田栄太郎，庄司幸吉，渡辺りやう，庄司トモエ，北林かの，桃野喜美子，大上亮平，筧田正之助，池田久五郎，土肥宇三郎，結城守太郎，杉村弘，大野順一，横江宗正，北野義周，宇島宇八，小林正雄，鈴木廉三九，大宮司清治，菊池勘左衛門の諸氏」とあって，当時進野先生は，まだ旧姓の池田で，旧制富山中学校の勤務でした。昭和３年に富山師範学校に転任され，昭和４年に大宮司先生の転出の後をうけて，菊池先生と２人で本会の世話をなさいました。両先生のご苦労によって，昭和１１年には立派な富山博物学会誌の創刊号が発刊され，引き続き昭和１３年には２号，昭和１５年には３号が刊行されたが，だんだんと厳しい世相となって，学会誌の発刊はもちろんのこと，学会活動も終戦となるまで中断の状態となったが，昭和２１年のまだ世相が混乱の状態にある中から６月７日には富山中学校で総会を開催，幹事，顧問推薦，行事打合を行なった。昭和２５年に従来の「富山博物会」を「富山生物学会」に改め，役員は会長と幹事制にして，その会長には，進野先生に満場一致でお願いすることになった。それより事務局は富山高等学校，富山中部高等学校，富山大学，富山県理科教育センター，上市中学校と転々とする中にあって，昭和４２年度まで創業時代の会長として活躍して頂いたことに対し深く感謝申上げる次第であります。当時を思うに，先ず富山生物学会として刊行したものは，昭和２６年の富山生物学会報№１でした。次には昭和２８年に富山生物学会誌第５号でした。この時の進野先生のお喜びになったことと，学会の進むべき方向を述べられた巻頭の「復刊の喜び」をここに転載して，生物学会の創業時代を偲びたいと思います。

この学会も去る４月の総会で１９２回の例会を重ねたのであるが，何とかその例会の記録を残し，会員相互の研究と親睦使節たらしめたいというので，２６年度は取りあえず謄写刷で「富山生物学会報」№１が配布されたのであった。しかし，希望は更に前進して，印刷の会誌にしたいという声が２７年度の総会にその実現を議決し，その後，幹事諸君の努力で編集も成り，巻末に記した諸賢（編集者　坂下栄作　協力幹事　安部武雄　本多啓七　山本利彦）の後援を得て，いよいよ活字に組まれる段階に到達し得たことは会員諸士と共に喜びにたえない次第であります。また，嘗て同じ思いで昭和１１年（１９３６年）「富山博物学会誌」第１号を編集し，１３年に２号，１５年に３号を刊行しながら，戦争のため中止となり，預っていた若干の残部を私宅の疎開荷物と共に戦災で失った私には，またこの復刊は蘇生にも似た感激なのであります。

この会誌は，地方学会の性格が特殊性をもつように，中央学会誌とは稍々任務と味が異なり，わが会員の誰でもが，小さな郷土的教材資料や些細な観察でも，指導体験談や研究着想など，親しみある気楽な語り場でありたいと念じている。しかし，フランスが世界に誇る１９世紀の実験生理学者クロード，ベルナールが，その著「実験医学序説」に「言葉の危険について」を題して「屢々人は事実を離れて，観察された事柄以上を表現している言葉によって結論したために攻撃されることがある」と警告しているように，如何に断片的な事実であっても，吾々の語るものが〝真実〟なものであればその価値は変りがないと信じている。

昭和２８年５月５日　子供の日のあさ　　会長　進野久五郎

富山生物学会は富山県全体を対称とする学会であるとの見解から昭和３７年には富山県生物学会と改称し，この学会はアカデミックな研究に帰るべきであるとの大学側の意見で，日本生物教育会全国富山大会を別途の組織体制をつくって同年実施したので，これが今日の富山県生物教育研究会設立の発端となり，生物研究と生物教育との研究発表体制が完全に分離するようになった。

学会誌第６号の発刊は昭和３９年になったが，進野先生は序文に「……会誌もせめて隔年刊行が希望されたが，前述の通り研究組織が幾分多発するとその実現も困難で幾度も計画しては中止せざるを得なかったのである。ここに第６号を送り出すことの出来ることは，今までの労苦を思うと一入の喜びである」と述べておられるように，この会誌は発表者が自分で印刷したものを集めて製本したもので，会誌の発刊を願う止むに止まれぬ気持の発動であった。第７号は昭和４１年，第８号は昭和４２年に発刊したが，それ以後は毎年発刊するような体制となった。これはひとえに進野先生がこのような基盤を築いて下さったお陰によるもので，唯今，第２５号の会誌を通して，先生が本学会を育成するために払われた大きいご労苦を偲びつつ，そのご功績をたたえて，会員一同心より先生のご冥福をお祈り申上げるものであります。